

あしすと通信

札幌市子どもの権利救済機関 子どもアシストセンター広報紙



vol.27

2025年2月

子どものこと一緒に考えませんか？



助けに入るか？見守るか？ —ピンチのときこそ落ち着いて—

品川ひろみ代表子どもの権利救済委員

前回のあしすと通信（第26号）では、子どもが健やかに育つために自己肯定感が大切なこと、また子どもの自己肯定感を育むためには、親をはじめとする大人のかわりが大切であることをお伝えしました。

しかしお読みになった方のなかには、子育てはそんなに優しいことばかり言っていられない…とお考えになった方もいるのではないのでしょうか。

親と子どもとのかかわりはその子どもの個性や年齢によって、さらにそれぞれのお子さんの特性、おかれている状況によって異なります。とくに日常のなかで何か問題が生じた場合は、親としての対応に苦慮することもあるでしょう。とりわけお子さんに学校に行きたくない様子が見られた時は、いったい何が起ったのか、どうすればよいのか、悩むところです。学校に足が向かない原因はさまざまです。友だちとの関係や、先生との関係、勉強の難しさ、子ども自身もなぜかわからない場合もあります。

親はそれに対して学校に行くように伝えるのか、見守るのか迷うところです。その時に大切なのは、子どもの言葉や態度から、子どもが何に困っているのかを知ることです。そのうえで、親がかかわった方がよいのか、見守り、励ますことがよいのか判断することが必要です。

子ども同士の関係でも、暴力やいじめなどの行き過ぎた行動や、SNSなどの利用によって危険な状況にある場合などは、ためらわずに助けに入る必要がありますが、それとは逆に、子どもが乗り越えることができそうなことは、親は励まし見守ることが大切です。

どんな子どもも、その子どものペースで成長・発達していくのです。そして階段を一つ昇ったことが、その子どもの自信につながり、自己肯定感を育むことにもつながります。しかし、子どものなかには、その子にとってのハードルが超えられず、「自分はうまくできない」「どうせわたしなんか…」と自らを悲観してしまう子もいます。それはまさに「自己肯定感」が低くなっている状態だと言えるでしょう。そんな時こそ親の言葉かけが大切です。「あなたなら超えられる」「きっと大丈夫」「あなたは大切な存在」そんなことをしっかり伝えましょう。

そうは言っても辛そうな子どもを見ると、親も子どもと同じように憂鬱になることもあるでしょう。しかし、親が子どもと同じように不安そうにしているのは望ましくありません。子どもにとって心理的な安全基地であるはずの親が不安になると、子どもはその不安から抜け出すことが難しくなるからです。子どもがピンチになっても、子どもの前では「大丈夫！」という態度で接し、そのうえで必要な行動をとりましょう。そのためには、親自身も不安を一人で抱え込まないよう、困ったときには信頼できる人や学校、相談機関などを利用するなどして、できるだけ安定した気持ちでいることも大切です。



相談現場の声、お届けします！

子どもや保護者から寄せられるさまざまな相談から、相談員たちは何を感じているのでしょうか。

品川代表救済委員と**朝倉救済委員**が相談員の声听取了。



<子どもたちが求めていること>

品川委員：相談を受けていて、子どもたちはどんなことを求めていると感じていますか。

相談員 A：認められること、褒められること、励ましてもらえることを求めていると感じます。

相談員 B：相談で答えを求めるといより、自分の中にある答えを第三者に聴いてほしい、わかってほしいという子が多いなと思います。

相談員 C：親に迷惑や心配をかけたくないという子も多いけど、心の奥では「親にもっと向き合ってほしい」と思っているのではないのでしょうか。また、必要としたときにつながれる第三者、自分に自信を持たせくれる第三者を求めているとも感じます。

相談員 D：思春期になると、親では関係が近すぎて、友だちや他人の方が話しやすいこともあるかと思っています。

朝倉委員：親子の関係は、一般的な傾向と家庭ごとの問題を慎重に考えなければなりません、皆さんはその子が何を求めているのかを注意深く聴いていますね。

<情報が多すぎて自信を失ってしまう？>

相談員 C：子どもたちは大量の情報に触れながら、変化の速い世界に生きています。自分の立ち位置を判断するために、SNS上の他人のキラキラした上辺の部分と自分の現実を比べて悩む子が増えている気がしますね。

相談員 B：自分に自信が持てないから不安で、簡単に手に入る情報にのめりこんでいかなるを得ないというところもあるのかもしれません。

相談員 E：情報量の多さに加え、価値観も多様な世の中で、子どもたちはかえって色んなことを選択しにくくなっているのではないのでしょうか。

朝倉委員：多様性と言われる世の中でも、子どもたちには理想像があるようです。その子の悩みに共感しながら共に答えを探していくというのが難しいところですね。

<相談員が意識する子どもの権利>

品川委員：子どもの権利の中で、皆さんが特に意識しているものはありますか。

相談員 A：命を大切にされ、安心して健やかに成長できる権利を意識しています。

相談員 E：その子にとってほっとできる場所や関わりがどこにあるのかということは考えますね。

相談員 D：安心・安全はもちろん、親に愛情を持って育てら

れることも大事です。大切にされた経験がないと、自己肯定感は育ちません。

相談員 B：周りのいろんな人に愛され、大切にされること。それが子どもの安心につながります。

<困っている親の支えになりたい>

相談員 D：不登校が増え、子どもに「学校に無理に行かなくていい」と言った先に、どうしたらいいか困っているという保護者の声を聴きます。

相談員 E：親も一生懸命に手さぐりで試行錯誤していると感じます。子どもとだけ向き合うと苦しくなるだろうから、私たちが話を聴き、一緒に考えることで、少しでも支え、寄り添うことができればと思います。

品川委員：それもアシストの役目ですね。親は「ちゃんと子育てしてなくてはいけない」と思うほど、うまくいかなくても相談しづらいのではないのでしょうか。話して気持ちがスッキリしたと言われると、良かったと思いますね。

<相談員のやりがい、アシストの姿勢>

相談員 A：子どもからの「相談員さんが真剣に向きあってくれたおかげで気持ちが楽になった」という言葉で、こちらの心も軽くなりました！

相談員 B：「聴いてくれてありがとう」と言われると、恐縮しつつも嬉しくなりますね。

相談員 C：誰かに話すだけで悩みの大半が解決することもあると思うので、ためらわずに相談してほしいです。

相談員 E：相談の中で、子どもが自分で「こうしてみます」と気づいてくれたときはすごく嬉しいです。

相談員 D：子どもに最終的には自分の力で次のステップに進もうという気持ちを持ってもらいたい、という思いで相談を受けていますね。

朝倉委員：日々色んなことに悩むのは我々も同じです。子どもと大人、相談する側とされる側と分けて、相談もコミュニケーションの一つであるという姿勢も大事にしたいですね。



相談員の声、いかがでしたか？
アシストセンターでは、子どもや保護者からの相談に、救済委員、調査員、相談員が真摯に向き合っています。
お子さんのことで誰かに話を聴いてほしいときは、お気軽にご相談ください。
現場からは以上です！

相談はこちら

相談は無料です

秘密を守ります

面談もできます

第三者機関です

大人用

011-211-3783

受付時間（終了時間の30分前までにご連絡ください）

月～金 10:00～20:00 土 10:00～16:00

日曜日・祝日・年末年始はお休みです

E-mail

assist@city.sapporo.jp
こちらを読み取ると入力の手間がなくて簡単です▶



ホームページ

<http://www.city.sapporo.jp/kodomo/assist/>

◀ホームページはこちらから



発行：札幌市子ども未来局子どもの権利救済事務局 TEL 011-211-2946